琉球大学学術リポジトリ

コメント6

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科
	公開日: 2017-02-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 寺本, 潔, Teramoto, Kiyoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002008530

コメント 6

寺本　潔[†]
Kiyoshi TERAMOTO

国内でも有数の観光立県である沖縄県の中心的な学術拠点、琉球大学の観光産業科学部に呼んで頂き、幾分緊張した面持ちで参加した。これまでは、筆者は教育学部の先生方との研究交流は重ねてきたものの、観光産業科学部の先生方とは大島順子先生を除けば皆無であった。観光人材育成の必要性が高まっている昨今、教育学の立場からも観光学を応援できないものかと思い、初等中等教育への観光教育の導入を研究し始めていた矢先の招聘であった。今回の機会に対し、関係者の方々に深く感謝申し上げたい。

まず、第一報告の飯島教授による「環境学と観光学」の関連性についてのご発表には、自分の知見の狭さに気付かされた。特に、沖縄など亜熱帯気候が有する太陽光のもたらす観光地イメージの形成についての教授の指摘は、有益な視点をわたしに与えてくれた。

続く、第二報告の大島准教授による「観光の教育力の構造化に向けて」は、わたくしの専門分野である社会科教育学の視点からも大変、刺激的な内容を含んでいる発表であった。

大島氏とは、日本環境教育学会でご一緒している関係上、環境教育の立場での研究交流はこれまでもあったが、観光現象そのものが内包する教育力を構造的には捉えていなかったため、とても今後の研究に示唆する内容であった。とりわけ、「観光の中で（in）」「観光について（about）」「観光のために（for）」という着眼点を含んだ構造化は、改めて物見遊山的な観光にとどまっていては発展が望めないことを教えられた。観光は、非日常への移動を伴う自己再発見の旅であるが、環境への責任ある対応も同時に求められる。大島氏の発表から持続可能な観光というフレーズの重要性に気付かされた。

また、沖縄本島北部や水俣における大島氏による観光教育の実践報告も拝聴することができた。とりわけ、国頭村は、国立公園指定を目指しつつ、近い将来、世界自然遺産指定さえも視野に入ってきたことで日本におけるエコツーリズムの代表的な事例地にもなることが予見できる。観光という現象や機会そのものが、一種の人間形成の意味を持っているとわたしも確信しているが、大島氏の構造化への言及は、「観光の教育力」の意義を感じさせてくれる発表と言えよう。

実は研究会に先だって、大島氏の計らいで外部の方々もお呼びした寺本単独のミニ講演を 1 時間程度、大学内で開いて頂いたことにより、下地教授ほか、沖縄観光コンベンションビューローや沖縄県の関係者、観光専門学校、大学院生の皆さんとも交流できたことも大きな収穫であった。観光学という裾野が広い分野の発展には、開かれた機会がなによりも大事であることを改めて感じた 1 日であった。

[†]玉川大学教育学部教育学科